The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	行動と知覚
Author(s)	桑原, 英之
Citation	メタフュシカ. 2005, 36, p. 79-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6399
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

行動と知覚

桑原英之

序

従来知覚は認識の手段として論じられてきた。同時にそこから生じてくる後述するような哲学上のアポリアが生じてくる。たいしてベルクソンは『物質と記憶』において「行動」という視点を導入し、アポリアの緩和をめざそうとする。本論文の目的は行動としての知覚というベルクソンの議論をおい、アポリア解決の正否と、知覚を行動として捉えることの問題点を検討することである。主に、ベルクソンが提示する二元論＝心身問題の解消のための３つのポイントを整理した後、心身の二元論解消が身体の二義性へとつながっていることを指摘し、問題の根が時間論にあることを述べる。

１　知覚

先にアポリアと呼んだものは、伝統的二元論のことである。いわゆる異なる２つの実体（精神と物質）が立てられるときの、その２実体間の関係性が問題となる。特に人間において心身問題（または心脳問題）として現れるわけだが、解決法は、およそ２つある。すなわち、いずれかの実体に還元するか、交通不能な２つの実体の並行性を主張するか、の２つである。ベルクソンの立場は、結論から言えば、認識論上は二元論者であり、存在論上は（若干不明瞭な）一元論者である。実在について人間が何をどこまで知りうるかということを正しく理解すためには、二元的、ただし正確に捉えなおされた上での二元的スキームを必要とするが、存在論上、つまり実在の根源的在りようを正しく理解するなら、実在は一元論的である、ということである。前者のベルクソンがとる認識論上の二元的スキームとは、例えば物質と記憶（＝精神）、知覚と記憶などであり、絶えず「本性の差異」として提示される。後者の存在論上とらえる一元的枠組みは、持続の緊張－ 弛緩という（完全ではない）枠組みであり、認識論上踏まえた本性の差異が、程度の差異としての本来のありようを、すなわち強度の差異として再提示する。

大きな整理としてはこうなる。ベルクソンは二元論解決の具体的な３つのポイント提示してい

る。延長と非延長の対立の解消、自由と必然の解消、質と量の対立の解消の３つである。これを上で述べたことに即して言えば、延長と非延長の対立、自由と必然の対立の解消は認識論上の謬見を取り除くこと、つまりは正しい二元的図式を考えることで解消され、質と量の対立はベルクソンの存在論上の一元的枠組みで整理される。そしてそのいずれにも関わってくるのが身体、行動する、自ら動くという身体にある。まず第１の対立からみていく。

基本的な言葉の定義を確認しておこう。「観念論や実在論が現象と存在にわけてしまう以前の物質」（MM.2）[1]、これをイマージュ（image）と呼び、「イマージュの総体を物質と呼び、その同じイマージュが特権的イマージュすなわち身体の可能な行動に関係づけられた場合には、これを物質の知覚と呼ぶ」（MM.17）。これで物質と知覚が定義された。大事な点は以下のことである。第１にイマージュには特別な存在上の位置づけはない。第２に身体はイマージュという言葉で表現されている以上イマージュである。第３にしかしその身体というイマージュは他のイマージュと「身体の可能な行動に関係づけ」る時に知覚を生み出すという点において異なる。つまり「イマージュはみな（中略）私が自然法則とよぶ一定不変の法則にしたがって、互いに作用し反作用しあっている」（MM.11）が、身体は受け取った運動と等しい運動を返す（反作用する）ことはしない。身体は、身体の利害に関わるかどうかによって、かつ「身体の可能な行動」（MM15-16）に応じて運動を選択する。そしてその選択肢となって現れるものが、知覚である。行動の可能性（＝「可能的行動」）としての知覚である。ポイントは、知覚をもとに行動するということではなく（これは従来のモデルである）、行動のための知覚としてしか現出しえないということにある。

身体にとって可能である、反応可能な行動可能性の選択肢をまだ成就（反作用）しきっていない未遂の運動、「生まれかけの行動（action naissante）（MM.29）「可能的な行動（action possibile）」が知覚である。知覚はこのようにして明確に、行動という観点から捉えらる。知覚を行動から捉えるとは具体的にどういうことか。たとえばベルクソンが挙げるのはアメーバの例だ（MM.28）。アメーバは餌を知覚すると同時にそれを捕食するという行動に及ぶ。つまりアメーバには餌の知覚に対して捕食という行動の選択肢しか用意されていない。アメーバの捕食という行動においては、餌の知覚と捕食という行動が一体化しており同時に起こっている。対して人間は、たいていは、食べ物の知覚（＝料理を目にしたり匂いをかいだりすること）と食事は別である。その違い（＝未決定、選択、時間的遅延）は何に由来するのか。それは神経系や神経中枢の複雑さの差異である。しかしその差異も本質的ではない。知覚が行動のために存在することにはかわりがないからである。「表象の道具ではなく行動の道具」（MM.78）であることは揺るがない。複雑さが最も高い脳はどうであるか。高度な器官である脳もまた行動の道具であろうか。

感官で捉えられた運動は神経を伝って脳に運ばれると、脳はその運動を翻訳し表象へと変換し、外界に向けて投射する。従来、脳と知覚或いは表象の関係はこのように考えられてきた。認識の手段たる、知覚を生み出すブラックボックスとしての脳である。ベルクソンの考えはここでも変

---

[1] Henri Bergson, *Matiére et mèmoire*, Press Univerisitaires de France,1999

わらない。あくまで知覚は行動によって制約されている。知覚は身体の行動のためにある。従って、脳が知覚に関わっているとすれば、それは行動としての知覚に関わっている。だから脳が仮に特別だとして、しかしそれは身体というイマージュが他のイマージュから区別された、その特殊性のみから差異化される。即ち、身体のイマージュが運動をそのまま反作用するのではなく、未遂のままにし、選択し、可能的行動としての知覚を示すという点で他のイマージュから区別された点である。その身体のもつ神経中枢系の圧倒的複雑さを脳は程度差としてもっているにすぎない。

なぜそうなるのか。身体はイマージュである。当然身体の一部位にすぎない脳もまたイマージュである。また定義上、物質とはイマージュの総体であった。したがって脳が物質の全体的表象を生み出すとうい考えには矛盾が生じる。部分でしかないイマージュとしての脳が物質全体のイマージュを生み出すこととなり、部分が全体を含むことを意味してしまうからだ（MM17）。そして身体は行動の可能性知覚として示すために、運動を選択する。行動にとって有用な運動を選択し、その可能性を知覚としてしめすのである。脳もまた選択の器官である。「脳とは、うけとめらえれた運動にたいしては分解の道具であり、遂行される運動にたいしては選択の道具」（MM.26-27）なのである。したがって運動を翻訳したり変換したりするものではない。さて、ここで、ベルクソンは問いを立て直す。「一方の体系では各イマージュがそれ自体として、周囲のイマージュから現実的作用を受ける明確な範囲で変化し、他方の体系ではすべてのイマージュが唯一のイマージュにたいして、この特権的なイマージュの可能な作用を反射するさまざまな範囲で変化するが、同じイマージュがこのような２つの異なった体系に入り込みうるのはなぜであるか」（MM20-21）。問いはどのように変化したのか。問いは、知覚を認識そのものの自己目的化から離れ、即ち身体や脳を認識の道具とする視点から離れ、行動する身体という視点から基礎付けなおすための問いに変化している。もし、脳を認識＝知覚するための道具と捉えるなら、脳はどの程度まで外界ないし物質を正しく知ることができるか、捉えることができるのかを問うことになる。つまり物質と表象の一致・不一致が問題となる。対していまや問いは、物質と表象の一致・不一致を問うてはいない。問いが向けられているのは、２つの変化の体系間の差異である。変化するものと変化するものとの関係である。ことわっておけば、イマージュ間に存在論的差異はない。「議論に決着をつけるためには…私たちはどちらの場合にも事物をイマージュという形でしかとらえられないのだから、問題をイマージュとして、しかもイマージュのみの関数として、提起するのでなければならぬ」（MM.21）と説く意味がなくなってしまうからだ。イマージュの関数としてのみ考える以上イマージュの存在論的差異、たとえば知覚と物質、イマージュと物質との差異を考える必要はない。定義上、知覚も物質もイマージュだ。存在するのは、イマージュの変化の差異だけである。イマージュがイマージュに働きかける恒常的変化と、イマージュによって働きかけられた身体の行動にもとづくめまぐるしい変化との差異である。そして両者の間に本質上の差異は存在しない。なぜなら行動する身体を基礎として生じる知覚上の変化は、イマージュの恒常的（＝必然的）変化から、身体の行動のために引き算された変化でしかないからである。一般的イマージュ間の変化とは、イマージュにおいてすべての作用・反作用がたえず現実的作用として汲み尽

くされているのに対し、知覚におけるイマージュの変化は、身体を介し、未だ現実化されることなく遅延されたままの作用が、未決定なものとして、まさに私の身体の行動に左右されるものとして、現れているだけなのである。ここで、３つの対立のうちの１つ、自由と必然という対立が認識論上の問題として解決される。必然とはイマージュの必然的・恒常的変化であり、自由とはこの未決定のことであって、両者には本質上の差異がない。また延長と非延長の対立もまたない。知覚を物質（＝延長）の表象（＝非延長）とする認識モデルをそもそも採用していないからである。そして、このように考えることを可能とする条件は、知覚と記憶の間に本質的な差異を認めて、認識上の有意味な二元的枠組みを作り直しているからである。

２．記憶

知覚を物質と部分と全体という程度の違いとして考えること。それを可能としていたのは、純粋知覚という権利上存在する極限、記憶（より正確には記憶と感覚）を一切除外したで考えていたからである。ベルクソンにとって知覚と記憶には本性の差異がある。それは知覚が現在のイマージュであるのに対して記憶が「過去のイマージュである」ということから生ずる。たとえば「大きな苦痛の記憶が微弱な知覚にすぎないとすれば、反対に私が感ずる強い苦痛は、減少していけば、しまいには思い出される大きな苦痛になってしまう」（MM.154）という奇妙な事態が、記憶と知覚の差を見誤った場合に起きてしまうことを例としてあげている。では決定的違いは何か。それは現在と過去との、時間的差異である。知覚が現在に存在するのに対し、記憶は過去である。ここでベルクソンは権利上存在する記憶として「純粋記憶（souvenir pur）」を導入する。伝統的二元論の解決には、正しい二元的スキームが必要であると述べたが、その一方に（純粋）知覚＝物質（＝現在）をおいたとすれば、ここで対置されるのが（純粋）記憶＝精神（過去）でえる。

知覚が行動から捉え返されたように、記憶もまた行動と運動の中で捉え返されなければならない。そのために、ここでも脳と記憶の関係が吟味される。結論から言えば、脳を記憶の貯蔵庫とするような考えからの脱却である。たとえば、記憶が脳に蓄えられていると考えるとき、人はあたかも記憶を保存する細胞があり、記憶の１つ１つがそれらの細胞１つ１つに対応しているように考えている。このような考え方に対して、ベルクソンはリボーの法則を例証にあげ反論する（MM.131-132）。リボーの法則によれば、健忘症において忘れられていく品詞の順序とは、固有名詞、名詞、最後に動詞の順序であるという。とすれば、もし１つの記憶が１つの細胞に対応しているのであれば、記憶の中で固有名詞だけが消えることの説明がつかない。記憶細胞に異常があれば記憶全体が侵されるはずなのに、である。ここで述べられていることは、知覚の場合と同じ構造である。知覚を考える場合には、知覚を物質の表象（＝再現前）として捉え、両者の一致・不一致を考えるという認識論的視点から抜け出そうとしていた。同じく記憶の場合も、記憶の外に記憶以外の実体や記憶へと変換するもの（例えば脳内の神経細胞）を立て、両者の一致・不一致を考えてはならない。権利上、物質と一致する純粋知覚が存在すると考えられるように、権利上、精神と一致する記憶そのものが存在していると考えるべきである。

そして記憶そのものが存在すると考えることは、物質が絶えざる運動・変化の相で捉えられて

いたように記憶もまた絶えざる運動のもとで考えることである。そしてその運動は行動、さらに行動としての知覚に向けられた運動である。これは時間的にみれば過去が現在へと侵食している運動である。具体的に言えばイマージュを再認である。そもそも私たちは事物を知覚する時には必ずなんらかの再認を行っている。しかし再認をするには過去のイマージュが残存していなければならない。そのイマージュの残存の仕方、つまり記憶の在り方について考える必要がある。ベルクソンは記憶を２種類に区別し論じている。すなわち「行動」としての記憶と「表象」としての記憶である（MM.83～）。「行動」としての記憶は反復することにより身体に「習慣」として定着したものであり、最早個人の固有性から引き離されているという点で「非人格的（impersonnel）」（MM.88）記憶であって、その役割は「有益な効果を現在の瞬間にまで及ぼす」（MM.87）ことゆえにいつでもすぐに随伴運動へと発展するという、瞬時に現実化可能な「運動的記憶力」（MM.173）のもとにある。それゆえこれは記憶というよりも「習慣」に等しい。他方「表象」としての記憶は二度と反復されることのない一回性の人格的記憶の残存であるが、それが運動へと発展するのは「気まぐれ」にすぎない「自発的記憶（souvenir spontané）」（MM.99）であり、であり「観想的記憶力」（MM.173）の元にある。しかし記憶の能動性を考えるに当たって「過去のイマージュの喚起」が真に問題となるこの後者の記憶を本当の記憶であると考える。（先に述べた純粋記憶は、この後者に相当する。）

以上のように記憶を２種類に区別した上で、再認における記憶の知覚に向けられた運動を考えてみる。従来再認とはまず事物を知覚し、次にその知覚と関係のある記憶を脳へ照合した後、その知覚に記憶や観念を付けたし、そのような精神によって深められた表象へ移行するというふうに考えられてきたが、ベルクソンはそれに反対する。なぜならこの考えは、先に述べたように記憶を脳に固定し運動性を欠いた受動的なものとしていること、そしてそこから得られる知覚とは「対象から遠ざかる」（MM.114）ばかりだからである。ベルクソンは再認において「知覚が機械的に記憶の出現を決定する」（MM.107-108）のではなく記憶が自発的に知覚へと現れる記憶の能動性を考え、対象から遠ざかるのではなく記憶が自発的に知覚へと現れる記憶の能動性を考え、対象から遠ざかるのではなく対象と精神の間に「回路（circuit）」（MM.114）として成立する知覚を考えるのである。能動的な記憶は対象を知覚するとすぐに随伴運動を伴うということからもその運動性は明らかであるが、それはある運動に対して常に決まった反応を返す機構を作り上げてしまっているという点において受動的であり既に身体の習慣であって、記憶という精神の能動性を考えることはできない。しかしこの記憶は「表象」としての記憶が運動としての知覚の中へ入ってくるのを準備するという大切な役割をもつ（MM.108）。次に「表象」としての記憶について考えると、これは感覚＝運動（sensori-moteurs）系という、行動へ向けられた意識を混乱させ中断させるものゆえ（例えば夢とはこの感覚＝運動系の平衡と連絡をたたれた状態である。MM.171-172 参照）、自由に行動へと移行するための運動性をもっていない。ゆえにこの記憶は「現在の印象と随伴運動の間に亀裂が生ずるのをひたすら待ち構えて、そのイマージュを滑りこませよう」（MM.103）とする。つまり自発的記憶は自らを運動へと発展させ、知覚に採用される機会を伺っているのである。ではどのような記憶が運動へと発展する可能性をもっているのか

といえば「現在の知覚と類比的な表象」（ibid.）であり、その現在の知覚とは「行動」へ向けられていることを思い出せばやはり「行動」に関係する記憶であって、「表象」としての知覚は「類似したイマージュを選んでは新しい知覚の方へそれを投」（MM.112）じようとするのである。

以上のように２種類の記憶がいかにして運動へと展開するのを見たうえで、これまで２種類にわけてきた記憶を別々にではなく１つの進行として考えてみることにする。「表象」としての記憶に相当する純粋記憶はその状態では権利上でしか存在し得なかったが、それは「行動」としての記憶が身体にその受け入れを準備することからも分かるとおり完全に運動から切り離されているわけではないことがわかる。そこで純粋記憶がその準備に答えるべく半ば運動性を備えた状態の記憶を「記憶心像（souvenir image）」とベルクソンは呼ぶ（もちろんその変遷そのものが運動であるから純粋記憶から分離されるわけではない）。だからこの記憶心像は純粋記憶と知覚の両方に浸透しあった状態になる。しかしそれが完全に知覚へと採用されるには行動に適した運動へと変換されなければならない。そのために記憶心像は「運動図式（schème moteur）」（MM.121）と呼ばれるものへと入り込み、そこで行われる「初次的な弁別作用」（MM.126）によって行動に適した運動へと変わり、近くの中に入るのである。知覚においては外界からの刺激を感覚器官で受け取りそれら多数の同時的刺激を一定順に並べ「莫大な数の要素的感覚を引き起こす」（MM.144）ための感覚中枢の存在がある。対してこの「運動図式」とは、これを記憶の側からみれば記憶にとっても同じ役割を果たす「心像中枢」（ibid.）の役割でもあり、運動図式もそこに存在する。脳に損傷がある時あたかも記憶を失うかのようにみえるのは脳に記憶が蓄えられ、その記憶が破壊され失われるからではなく、この一連の流れを阻害することに原因があるのであって、精神たる記憶が失われたり消えてしまったりすることはない。ゆえに記憶の現実化は記憶全体の中から特定の事物としての記憶が選ばれ、それら個々の記憶が個別に知覚に付け加わっていくのではなく、「記憶の最終かつ最大の外皮」（MM.116）たる純粋記憶が「内部の同心円へと収縮反復し…人格的な形態から離れて平板化して現在の知覚に適合する（ibid.）、純粋記憶全体の運動なのである。つまり、純粋記憶という過去の全経験がその都度行動に適した段階に記憶を収縮させ「一番役に立つ側面を差し向ける」（MM.188）のである。そしてこの記憶の能動性こそが記憶の真の運動であり能動性であって、知覚と記憶の関係は「（記憶は）いっそう完全な具体的な形をとればとるほど、ますます知覚と融合する傾向があり、知覚はそれらをひきよせるとともに、それらは知覚から枠組みを採用する」（MM.140）。これを再認の問題としてもう一度考えてみると、再認は「行動」としての記憶が瞬時に反応する「非注意的再認」と「表象」としての記憶が能動的に想起されることによって起こる「注意的再認（reconnaisance attentive）」とにわけられ（MM.107）、前者の「求心的な流れ」と後者の「遠心的な流れ」という２つの流れが組み合わさってこそ判明な再認された知覚が生じる（MM.142）、とベルクソンは結論するのである。このとき知覚は「絶え間無く創造し、再構成する」（MM.113）運動となるのである。

これまでの議論を振り返っておこう。まず物質はイマージュであり、知覚は変化や運動の中で捉えられた。次に精神（意識）たる記憶の運動をどう捉えるべきかが示された。ゆえに残りは運動の関数として示された両者の根本的ありようである。

ここで解決の糸口となるのは意識も物質も運動として捉えてきたが、この両者の運動はまったく関係をもたないのかどうか、ということである。物質の運動の特徴は規則正しくひたすら同じ運動を繰り返すことであった。それに対して意識は記憶力が記憶を喚起し知覚に記憶を侵入させ知覚を「絶え間無く創造し、再構成する」運動であり、物質の世界を行動のために不動化させていく（「知覚とは不動化するということである」（MM.223））ことを目的とする。その意味で意識は記憶力の絶えざる運動であるわけだが、記憶力は単に過去のイマージュを喚起することのみがその役割ではない。実はそもそも私たちに物質の運動が感覚的性質として与えられる時から、既に記憶力の恩恵をこうむっているのだとベルクソンは述べる。その例としてベルクソンは私たちが「赤色」という質を知覚する時のことをあげる。赤色光線は一秒間に400兆もの振動をおこなっているという。しかし人間が把握可能な最短の時間の限界は500分の1秒であるから、もしも赤色光線の振動を振動として全て把握しようとすれば25000年近い時間を要することになってしまう、とベルクソンは指摘する（MM.230-231）。しかし実際の生活においてこんなことは起こっていない。それは既にそこに記憶力が働いているからである。ここでいう記憶力の働きとはその無数の振動をある持続（dureé）をもった諸瞬間へと収縮させてそれらを綜合することである。ここから明らかになることとは、私たちが知覚において捉えている諸性質とはイマージュの無数の運動をある持続へと凝縮し緊張させたものである、ということである。また感覚的諸性質における「質」の違いとしてあらわれているものとは持続へと凝縮させる緊張（tensiton）の程度の違い、張りの具合の違いに過ぎない。だから「あらゆる知覚はすでに記憶力」（MM.167）であり、「私たちは実際上過去を知覚するのみ」（ibid.）である。以上のことから物質と意識の関係について考えると、私たちが物質をある「感覚的諸性質の連続すなわち具体的延長」（MM.227）として捉えることができるのは、記憶力によって物質の緩慢な運動の緊張を高めて凝縮し、それを意識における「持続のリズム」（MM.278）の中へと組み入れることによってはじめて可能なのである。つまり物質はイマージュそれ自体において存在しているが、それがみせるあの輪郭をもった諸性質の集まりとしてのイマージュの姿とは、記憶力の働きによって意識の持続へと固定され、既に不動化された後の姿なのである。ゆえに意識と物質をわけていた運動の違いとは、この運動の緊張の差異ということになる。緊張を高めればそれは意識における持続へと凝縮され、その緊張を解消すればそれらは無数の運動へと分散していく（MM.233-234）。ここに「質と量」の対立を解消する道が、物質と意識のその本来のありかたに即して、存在論上において示されたことになる。

３　心身問題

従来の二元論的問題機制、特に心身問題は、以上３つの対立を解消することによって克服されると述べられていた。しかるにこれまでの議論によって３つの対立は解消されたはずである。しかし本当にこれで心身問題は解決されたといえるだろうか。というのは、これまでの議論によって明らかにされたこととは、精神という記憶（力）がイマージュである身体へと接合される過程であったのだが、それを可能としているのは身体に対して、一方ではそれがイマージュであるこ

とを認め、他方では記憶が入り込んでくるための準備を行う「行動の記憶」が定着したところの身体を認めているわけだから、心身二元論の問題は、身体の二義性へと問題をスライドさせているだけではないだろうか、という問いが残ってしまう。ここではこの問題を取り上げている山形の論文[2]を手がかりに、この問いを突き詰めてみよう。

まず山形は心身の問題が身体の二義性に起きかえられていることを指摘する。それはまず一方で身体が物質の運動を利用する「現実の運動体」（山形、46）であり、他方では精神の芽生えを備えた「記憶的なもの」（ibid.）である。よって心身の対立を解決するには、身体に帰せられた二義性をどちらか一方において統一しなければならないのだが、現実の運動体としての身体から統一することは不可能である。反対に記憶は記憶心像と呼ばれるものによって知覚と浸透しあっていたのだから、身体へと接続可能である。ゆえに統一は身体の「記憶的なものの方から行われるべきであろう」（ibid.）と述べる。では「現実の運動体」としての身体は「記憶的なもの」の身体からいかに統一されるのか。

そもそも現実の運動体としての身体とはなんであろうか。それは運動をやり取りするイマージュであり、「宇宙の生成の瞬間的な断面で裁断された時の身体の姿」とは「感覚―運動系」であったわけだが、これを本来の時間の中にもどし「身体を具現化させ」た時、この身体が占める位置は常に現在である（山形、47）。ところでこの現実の運動体としの身体が占める現在とはなんであるかといえば、ベルクソンによれば記憶力によって振動を収縮されたところの感覚という「直前の過去の知覚」と、行為または運動という差し迫った未来を自ら決定するもの」とを含んだ、やはり「感覚―運動系としての身体についての意識であり、持続である。しかしこの感覚―運動系としての身体は現実の運動体としての身体だけでは考えられない。なぜなら、ここで感覚が「直前の過去の知覚」であるのは、感覚がそれ自体において過去性をもっているからではなく、記憶力による収縮がなされることによって感覚は過去性を得ているからである。ではこの感覚―運動系としての現実の運動体はどのようにして「記憶的なもの」から統一されるのか。ここで山形は身体が「習慣を形成」（山形、48）し、この習慣とは「過去の有益な行為の蓄積」である「好意的記憶」であり、ベルクソンが「身体の記憶」と呼ぶものであることを指摘することによって、身体は過去性をもつことを示す。では残された運動の方はどのように説明されるのか。そこで山形は同時に身体は、「具体的な知覚が無数の純粋知覚の積分である」ように、「遠い過去からの結うような行為が雪だるまのように結集した習慣の系」である、と考えるのである。以上のことから身体は「行為的記憶として過去に属し、同時に習慣の系としての行為の、運動の遂行者であり得る」と結論し、身体は習慣という記憶的なもの、即ち、身体の過去性の方から統一される、とする。

ではこれで真に問題が解決されたのか。実はそうではない。というのも、身体がその過去性において統一された今、時間が流れていく中で身体が「直前の過去としてとどまり続け得る」（山形、49）のはなぜなのか、という根本的問いが残ってしまうからである。なぜなら、過去とは、

2　山形頼洋「知覚と持続」、澤瀉久敬『フランスの哲学２　生命をさぐる』、東京大学出版、1975

「無力である」ことがその定義であったからである。とすると「なぜ身体は過去の中に流れ去り忘却の淵に沈んでしまわないのだろうか。」

結

以上の議論が示すとおり、身体の二義性を統一しようする試みは、再度ベルクソンの時間論の、根本的問いにつきあたるといえるだろう。すなわち、なぜ過去は無力なのか、という問いである。記憶について論じたとき、実は問わないままに棚上げしていた前提があった。それは、記憶の無条件の保存、という前提である。記憶を論じたとき、そこで明らかになったことは、記憶が知覚の中に入り込む過程であって、記憶が自らを保存する力ではない。記憶はあくまで「過去」であるから、それ自体において自らを保存する力はないはずである。少なくとも脳がその役割を果たし得ないことはベルクソン自身が実証的に証明してみせた。知覚と記憶とは、前に述べたとおり、現在と過去の関係である。記憶という過去は知覚という現在につなぎとめられたとき、過去の過去性はどのように維持されるのか。ゆえに身体が「記憶的なもの」から統一をはかられたとき、やはりその問いもまた身体へとそのまま引き継がれていたのである。

（くわばらひでゆき　臨床哲学・博士後期課程単位修得退学）

Action et perception

Hideyuki KUWABARA

Traditionnellement beaucoup de philosohes ont considéré la perception comme instrument de la connaissance. Bergson dans *Matiére et mèmoire*, par contrer, a le considéré comme action possible et par là il a essayé de trouver la résolution d'une difficulté philosophique. C'est le problème du dualism ou le problème de la relation du esprit au corps. Cet aritecle a pour objet de en suivre son resolution et de examiner si elle obtenir un succes.

Bergson présente les trios antithése comme la clef qui constituent la problématique de la dualism; l'antithèse entre l'étendu et l'inétendu, le nécessité et la liberté, et la qualité et la quantité. Il pense qu'elles ont pour cause de la faux prémisse de la connaissance qui manquent la vue de l'action. Il recompose et renouvele le dualiste schème avec une grand précison tenant la différence entre la perception et souvenir pour la différence de la nature et posant la conception de l'image, tandis qu'il renonce á le schème vieux. Nous confirme le développement de son argumentation et elle nous paraît clair mais il reste une question, finalement: la dualité du corps. Et si le corps comme sensori-moteurs s'unit par le côté de sensation, c'est à dire le passé, il est difficile de comprendre que parce que le corps pu reste en present. Cette question concerne la théorie de temps dans *Matiére et mèmoire* que le passé conserve automatiqument et exsite en soi-même.

「キーワード」
行動、知覚、身体、心身問題